

氏名	桂 直美		
学位の種類	博士（教育学）		
学位記番号	博乙第 2827 号		
学位授与年月	平成 29年 3月 24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	芸術教育の授業構成論に関する研究 － デューイの芸術哲学を軸とした理論と実践 －		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	大高泉
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	樋口直宏
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	根津朋実
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	唐木清志

論文の内容の要旨

桂直美氏の博士学位論文は、米国における芸術教育論を対象にして、特に授業構成の観点からその歴史的展開と各芸術教育論の特質を解明するとともに、それを踏まえた授業モデルを構築・実践し、個性的な芸術経験を重視する芸術の授業構成を研究したものである。

本論文は、二部構成を取り、第一部では米国の代表的な芸術教育論が取り上げられ、特に、それぞれの芸術教育論の中で提案される授業構成要件が分析されている。第二部では、授業構成モデルを構築し、日本の教育の文脈で実践しその可能性と意義が解明されている。

第一部、第一章では、芸術についての学習ではなく、芸術の美的経験それ自体を追究するために、デューイの芸術論における「一つの経験」、「想像力」、「批評」、「芸術作品」、「鑑賞」、「美的経験」、「質的思考」等の基本的概念が明確化され、また、カリキュラム構成法としての「発生的方法」の概念が明確にされている。

第二章では、1920年代のリンカーンスクールにおけるコールマンの「創造的音楽」の実践が取り上げられ、デューイの「発生的方法」に照らして分析されている。子どもたちがプリミティブな楽器を創作しながら音を探究する活動を提案するコールマンの立場は、音楽史に基づく「作業単位」としてこれまで解釈されてきたが、著者はむしろそうした音楽を生み出した人類の精神を子どもが経験するように導く「発生的方法」であったことを指摘している。

第三章では、1960年代から1970年代に至るカリキュラム開発運動期を対象とし、音楽科教育におけるリーマーと美術科教育におけるアイスナーの「美的教育プログラム」が取り上げられている。これらのプログラムは、デューイの芸術論に基づき「芸術の教育」を全ての人のものと位置づけ、また、教師の教育的働きかけによる「芸術への教育」の可能性を示しているが、評価の点で限界を有していることが指摘されている。

第四章では、アイスナーが提唱した、教師の創造的な授業構成をとらえ得る質的研究法としての「教育的鑑識眼と教育批評」が取り上げられその特質が解明されている。「教育的鑑識眼と教育批評」は芸術批評家をモデルにしており、個々のユニークな授業の質を知覚し評価できる力（鑑識眼）と、それを表現する技術（教育批評）という二つのモメントを持つことが明らかにされている。

第五章では、グリーンが提唱した「美的教育」における協同芸術鑑賞の教育が取り上げられ、先行する「美的教育」プログラムとの相違が、デューイの芸術論の受容の違いの観点から検討されている。グリーンでは、同じ芸術作品を並び見る水平な関係として教師と生徒の関係が捉えられ、これがデューイのいう「経験の再構成」そのものを目指したものであることが明らかにされている。

第二部、第六章では、「発生的方法」の授業モデルが作成され、「弥生の土笛」の授業が実施され、学びの様相が検討され、子どもが問う主体へと変容する過程、協同表現が可能になる過程が明らかにされている。

第七章では、第五章で論じた「美的教育ワークショップ」が授業モデルとして再構成され、美術科と音楽科で授業が実践され、そこでの経験の深まりの意味が「教育批評」の方法によって示されている。

第八章では、アンサンブルという集合的な音楽表現が取り上げられ「教育批評」によるミクロな分析を通して協同音楽実践としての特質と要件、および授業としての実現プロセスが示されている。

第九章では、より汎用的な「ワークショップ」の授業モデルが提案され、アクションリサーチを通して、教師の授業観の転換の可能性と教師と子どもの活動の連続性という視点から「鑑識眼」の機能が明らかにされている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、個性的な芸術経験を実現する新しい芸術の授業の構成要件を解明したもので、特に次の点が評価される。第一に、デューイの芸術哲学との関連から、米国における芸術教育論の展開と特質を解明し、それぞれの芸術教育論の中に示されている芸術の授業構成要件を批判的に解明していること。第二に、個性的な芸術体験を尊重する芸術の授業構成の要件を踏まえた「発生的方法」、「美的教育ワークショップ」および「ワークショップ」授業モデルを提示していること。第三に、そうした授業モデルを日本の芸術教育のコンテクストの中で実践し、その可能性や意義を明らかにしていること。

平成29年2月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。